# 2023年のオペラ界
## ― 全般の展望と主な劇場、団体の活動 ―

関根礼子

世界のオペラ界に多大な影響を及ぼした新型コロナウィルスのパンデミック（世界的大流行）も徐々に鎮まり、2023年5月にはWHO（世界保健機関）が約3年3カ月続いた緊急事態宣言を終了した。日本の厚生労働省も感染症法上の位置づけを、それまでの2類相当（結核等と同じ）から、季節性インフルエンザ等と同じ5類に移行し、行動制限はほぼ撤廃。感染自体はその後も続くのだが、オペラ活動は同年後半にかけて徐々に回復し、特にプロフェッショナルな部分ではコロナ禍前と大差ない活動を概ね取り戻すことができた。だが、セミプロやアマチュア中心の部分では回復状態に格差が大きく、地域によっては活動再開の見通しが立っていないところもある。

ともあれコロナ禍も落ち着いたので喫緊の問題はこれで一件落着…といきたいところだが、残念ながらそうではなかった。他国間の戦争とはいえ日に日に過酷さを増していく軍事攻撃が、日本のオペラ界にも陰に陽に様々な悪影響を及ぼしている。前2022年から続いているロシアによるウクライナ侵攻に加え、10月にはイスラム組織ハマスとイスラエルの軍事衝突が勃発。周辺国での緊張も高まり、中東情勢は極めて苛烈となって筆舌に尽くしがたいほどの被害が刻々と伝わってくる。世界は人道上の深い悲しみに覆われて、平和への願いが強く渦巻いた。日本を含む世界の軍事費は過去最高に達し、諸物価の高騰、文化予算の削減等、楽観を許さない厳しい情況が続いている。

緊迫した国際関係の中、2022年12月にウクライナ国立歌劇場（旧キエフ・オペラ）が来日し、1月に《カルメン》を上演した。管弦楽団、合唱団、バレエ等を伴う引越し型だが、舞台装置の輸送は極めて困難のため日本側で調達。舞台成果を問うというよりウクライナへの関心と支援を呼び起こす効果が大きかった。また、ウクライナ支援を謳ったオペラとして11月、室内オペラ《人魚姫》（作曲：笠松泰洋、台本：岩切正一郎、2011年初演）の上演が国際基督教大学で行われた。同作の2019年ウィーン公演で主役を歌ったナタリア・ステパニヤクとペトロ・ラデイコの2人のウクライナ人歌手が招かれている。

こうした支援はもちろん大切だが、加えて筆者が特筆したいのは、作品そのものを深く探究し上演を深めることにより、暴力に走る人間心理の解明や平和への願いといった普遍的な真理を強く訴える好演が相次いだことだ。例えば新国立劇場の《シモン・ボッカネグラ》で題名役を歌ったロベルト・フロンターリは、恨みや憎しみの絶えない対立関係にありつつも常に和解を望み続けるヒューマンな心を真実味豊かに演唱し、深い感銘をもたらした。東京二期会のヘンツェ《午後の曳航》では、宮本亞門演出が悲惨な殺人に至る少年の心の軌跡を丹念にたどり、日生劇場のケルビーニ《メデア》では栗山民也演出が、とかく残虐性だけが興味本位で強調されがちな主人公メデアの内面的必然性を説得力豊かに表現してみせた。暴力に走る理由が解明されることで和解への道を探ることもできるというわけだ。

このほかこの年に高い評価を得た公演には、演奏会形式によるものが多かった。演出はあってもごくわずかで、音楽面の充実が中

心。要因としてはコロナ禍の制限がなくなって海外から歌手や指揮者らが多数来日したことに加えて、諸物価の高騰で舞台上演に踏み切れない経済的事情もあった。東京・春・音楽祭で《ニュルンベルグのマイスタージンガー》がマレク・ヤノフスキ指揮のもと超ド級の歌手勢とNHK交響楽団による演奏で最高級のワーグナーを聴かせたのをはじめ、ジョナサン・ノット指揮東京交響楽団《エレクトラ》、チョン・ミョンフン指揮東京フィルハーモニー交響楽団《オテロ》等が圧倒的な演奏成果を樹立した。加えて沼尻竜典指揮京都市交響楽団《ニュルンベルグのマイスタージンガー》、同神奈川フィルハーモニー管弦楽団《サロメ》、高関健指揮東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団《トスカ》といった日本人指揮者組にも大いなる健闘が目立った。

年間を通して海外歌劇場の来日は上記ウクライナのほかイタリアからパレルモ・マッシモ劇場、ローマ歌劇場、ボローニャ歌劇場の3団体が行われ、コロナ禍前2019年の10団体には及ばずながら回復の兆しを見せた。今後、こうした大規模の招聘事業がどう変化していくのか、経済状況や国内劇場の発展との関係で予測の難しい面がある。

国内では地域に根差して活動してきた団体がそれぞれに年数を重ね、周年記念公演を銘打ったところが少なくない。コロナ禍で出来なかった公演を数年ぶりに再開したところもある。それらは成果も課題も様々で、特にここ数年の動きが今後の活動へのカギになりそうだ。

分野別では、バロックオペラはマイナーな分野であるとはいえ、かなり定着してきた感があって頼もしい。アントネッロのフランチェスコ・カヴァッリ《ラ・カリスト》、バッハ・コレギウム・ジャパンのヘンデル《ジュリオ・チェーザレ》、北とぴあ国際音楽祭のラモー《レ・ボレアード》、日本ヘンデル協会のヘンデル《トロメーオ》などが優れた成果を挙げた。専門性の高い分野だけに、今後も継続した取り組みが期待される。

子どもオペラも定着してきており、古くから続いているオペラシアターこんにゃく座の幼児・小学生向けプログラム、札幌室内歌劇場の子どものためのオペレッタ等のほか、シアターX（カイ）の《あえて、小さなオペラ『魔笛』》も16年目を迎えた。さらに最近は独自の創意を凝らした企画も出てきており、演出家菅尾友による欧州発の演目が新鮮だ。

### ■ 新国立劇場

1月の《タンホイザー》から12月の《こうもり》までシーズン公演10演目と高校生のためのオペラ鑑賞教室2演目（新国立劇場で7月に《ラ・ボエーム》、ロームシアター京都で10月に《魔笛》）の計12演目が予定通りに実施された。この内新制作は5月の《リゴレット》と2023/2024シーズン開幕の2つ《修道女アンジェリカ》《子どもと魔法》のダブルビルと《シモン・ボッカネグラ》の3件で、それぞれに意義深く深い感動をもたらすものとなった。

1月の《タンホイザー》は2007年のプレミエ以来3回目の再演。アレホ・ペレス指揮のもと、国際市場に名歌手を求めた美しい音楽と重量感のある舞台上演が久方ぶりに実現した。世間では簡略化した公演が未だ多い中、演出（ハンス＝ペーター・レーマン）をきちんと再現し、安定した舞台運びでワーグナーの世界を堪能させた存在感が光る。歌手ではエリーザベトのサビーナ・ツヴィラクとヴェーヌスのエグレ・シドラウスカイテの女声2人が立派だったのに対して、題名役のステファン・グールドは珍しく音程が下がり気味。同年9月に訃報が伝えられたので、体調がよくなかったのかもしれない。グールドは

数々の名舞台で圧倒的な人気があり、これが新国立劇場での最後の舞台となった。

2月の《ファルスタッフ》も海外からの複数の歌手や指揮者（コッラード・ロヴァーリス）の参加が公演の水準を高度に保ち、明るく陽気な喜劇オペラを楽しませた。暗くなりがちな世相の中、大変貴重な舞台だったと思わずにいられない。題名役のニコラ・アライモをはじめフォードのホルヘ・エスピーノ、フォード夫人アリーチェのロベルタ・マンテーニャ、クイックリー夫人のマリアンナ・ピッツォラートらがスケール豊かに表現をけん引、日本側もページ夫人メグ（脇園彩）、ナンネッタ（三宅理恵）らアンサンブル、合唱、管弦楽（東京交響楽団）ともに上々だった。2004年のプレミエ以来4回目の再演。演出はジョナサン・ミラー。

3月の《ホフマン物語》はフィリップ・アルロー演出で2003年のプレミエ以来4回目の再演。題名役のレオナルド・カパルボとリンドルフ等4役のエギルス・シリンスを中心にニクラウス／ミューズの小林由佳、オランピアの安井陽子、アントニアの木下美穂子の好演に加え、他の多数の日本人歌手がアンサンブルを見事に歌って豪華な舞台となった。指揮のマルコ・レトーニャがオッフェンバックの音楽を大変美しく印象づけたのも忘れがたい。

4月の《アイーダ》は5年ごとに再演される定番。新国立劇場は1997年にオープンし、翌98年1月に初上演されたのがフランコ・ゼッフィレッリ演出のこの《アイーダ》で、毎回6〜7回の公演が完売になる人気演目だ。舞台からこぼれ落ちんばかりの合唱団、馬に乗って登場するラダメス（ロベルト・アロニカ）等、エンターテインメント性も十分だが、その一方でドラマの深まりがイマイチだった感もあるのがやや惜しまれた。指揮はカルロ・リッツィ。新国立劇場では同公演からシーズンの最後までを「開場25周年記念公演」と銘打ち、新たな節目を迎えていることをアピールした。

5月は新制作の《リゴレット》。同作3つ目のプロダクションで演出はエミリオ・サージ。2013年のビルバオ（スペイン）でのプレミエ以来幾度か上演されている舞台だけに完成度は高い。適度に抽象化された舞台はリアリズムに反する部分も少なくない一方で、ドラマを深める表現が見事。そして何よりも歌手が素晴らしかった。題名役のロベルト・フロンターリは宮廷道化という存在そのものの持つ矛盾と複雑さ、苦悩の深さを味のある表現力で演唱。ジルダ（ハスミック・トロシャン）は美声を駆使した初々しい第1幕を経て、次第に挫折を知り、苦悩しつつも恋の純真さを失わない若い女性像を実在感豊かに表現して説得力があった。指揮はマウリツィオ・ベニーニ。

5月下旬にはこれも定番の《サロメ》。2000年にプレミエされたアウグスト・エファーディングの演出で6度目の再演となった。スコアのト書きを忠実に再現したようなトラデショナルな舞台が、現代演出の増えた今日ではむしろ貴重に思えるほどだった。コンスタンティン・トリンクスの指揮のもと、4人の外国人歌手とアンサンブルをにぎやかに固めた多数の日本人歌手の好取組により緊迫感のある舞台となった。ヨハナーン（トマス・トマソン）の堂々たる存在感と美声は出色だったし、本当に思春期のような自然体のサロメ（アレクサンドリーナ・ペンダチャンスカ）をはじめ、おのれの欲望のままに行動する王家ファミリーの世紀末的グロテスクさが見事な演唱で表現された。

6月から7月にかけて《ラ・ボエーム》がシーズン公演5回、高校生のためのオペラ鑑賞教室6回と、全部で連続11回の公演が行われた。粟國淳演出のプロダクションでプレ

ミエは2003年、再演は6度目となった。シーズン公演の初日に第2幕の開幕をやり直すというアクシデントがあったが、大過なく回復。美声のロドルフォ（スティーヴン・コステロ）をはじめ、ミミ（アレッサンドラ・マリアネッリ）ら海外歌手4人を迎えてマルチェッロ（須藤慎吾）、ショナール（駒田敏章）ら日本人歌手も健闘した。一方の鑑賞教室は全日本人歌手。ミミ（木下美穂子）がいつもの実力を発揮して突出していたほか、まだ声を出すことに懸命で歌と演技の一致していない若手もみられて、同事業が歌手の研鑽の場でもあることを思い出させた。

10月に新シーズン2023/2024が始まり、新制作が2つ並んだ。最初は10月のダブルビルで《修道女アンジェリカ》と《子どもと魔法》が沼尻竜典指揮、粟國淳演出の共通コンビで上演された。《修道女アンジェリカ》ではアンジェリカ（キアーラ・イゾットン）と公爵夫人（齊藤純子）のやり取りの辺りから緊迫感が高まり、手に汗握るラストシーンへと突入してダイナミックな歌唱力が発揮された。《子どもと魔法》は子ども目線でカラフルに作られた豪華な舞台美術が美しい。子ども（クロエ・ブリオ）を中心に家具や動物たちのアンサンブルが楽しくにぎやかな舞台を展開。このまま子ども向け公演としても喜ばれそうだ。

2つ目の新制作は11月の《シモン・ボッカネグラ》。ヴェルディの音楽が大変充実している半面、人間関係が入り組んで物語の成り行きが分かりにくく、日本ではこれまでレパートリーになりにくい作品だった。今回はピエール・オーディの簡潔にして要を得た演出により、作品の骨格と全体像がしっかりと表現されていた。演奏、演出とも国際水準を行く好舞台で、特に題名役ロベルト・フロンターリの演唱に真実味がほとばしって素晴らしかった。敵対するパオロ・アルビアーニ（シモーネ・アルベルギーニ）との対比の中で、和平を求めるシモンのアリアは何と深い感動を呼んだことだろう。アメーリア（イリーナ・ルング）と恋人ガブリエーレ・アドルノ（ルチアーノ・ガンチ）が咲かせた高音域の大輪も美しく、大野和士の指揮はそうしたヒューマンな優しさを穏やかに、本当に優しく表現して感動を深めた。

12月は年末恒例の《こうもり》。同劇場2つ目のプロダクションで、2006年のプレミエ以来6度目の再演。ごくベーシックな演出（ハインツ・ツェドニク）の中にも日本的感覚が舞台美術に加えられている。アイゼンシュタイン（ジョナサン・マクガヴァン）らオペレッタの職人技をマスターしている海外の歌手の参加が強力な支えとなった。日本人歌手はオペレッタの舞台経験に不足しがちな傾向が否めない中、フランクに急遽抜擢された畠山茂が役柄をそつなくこなしていたのは立派だった。

オペラ研修所は2月の修了公演で《コジ・ファン・トゥッテ》を星出豊指揮、粟國淳演出・指導で上演。7月の試演会、12月のリサイタルでアリア、重唱、小場面などを聴かせた。

### ■ 日本オペラ振興会

**藤原歌劇団**は新年をヴァッレ・ディトリア（マルティーナ・フランカ）音楽祭との提携による「ベルカントオペラフェスティバル イン ジャパン2022」で華やかにスタートさせた。コロナ禍で制限されていた外国人歌手の来日がようやく実現し、世界の第一線で活躍する歌手らを迎えてロッシーニの《オテッロ》を上演。作品の劇内容としてはヴェルディの同名のオペラを凌ぐものではないとしても、男声主役3人にテノールが当てられて、テノール同士の対決の音楽的迫力が猛烈だ。オテッロ（ジョン・オズボーン）の実声

での超高音の力強さは圧倒的だし、ロドリーゴ（ミケーレ・アンジェリーニ）、イアーゴ（アントーニオ・マンドゥリッロ）らを含めた声の競演は何と迫力に満ちていたことだろう。加えてデズデーモナ（レオノール・ボニッジャ）も輝かしく傑出した歌唱力で、無権利状態ながらしっかりと自己主張し誇りを持って息絶える女性像を表現。イバン・ロペス＝レイノーソ指揮で歌手陣に加えて管弦楽のザ・オペラ・バンドも好演し、めったに聴けないほどの名演が繰り広げられた。演出（ルイス・エルネスト・ドーニャス）は天井から何本ものロープを吊るしただけの簡潔な舞台で、そのロープがさまざまにあやつられて作中人物の心理を雄弁に物語る。オテッロを原作の「アフリカ人」という設定から「顔に大きな傷のある人物」に変えたところに現代的な配慮がうかがえた。なお、同フェスティバルではコンサートやシンポジウムなども開催され、オペラストゥーディオ受講生により、ドニゼッティのオペラ《パリのジャンニ》が日本初演されている。

1月下旬に《トスカ》が松本重孝演出のニュープロダクションとして上演された。作品に即したごく基本的な演出で、立体的に作られた舞台装置に新鮮さがあった。筆者の観劇した2日目は同団デビューの佐田山千恵が大役の題名役を大過なく歌い切り、カヴァラドッシの藤田卓也も力演、スカルピアの須藤慎吾は自身の表現力を一段と深めて悪役ぶりを発揮するなど、同団オペラの基盤を固めた感のある舞台だった。指揮は鈴木恵里奈。

4月に上演されたドニゼッティの《劇場のわがままな歌手たち》は原題直訳が《劇場の都合・不都合》というもので、1982年に東京オペラ・プロデュースが《ビバ！ラ・マンマ》の題名で日本初演し、その後幾度か再演。原作には複数の版があってややこしいが、今回は「批判校訂版に1827年の初演版とOtos版からの2曲を挿入した」藤原歌劇団版の初上演とのこと。芸達者の歌手が風刺を効かせて演唱すれば愉快な舞台になるのだが、筆者が2日目を観劇したところ、ダリア（プリマ・ドンナ）役の中井奈穂が光っていたほか、男声陣にはムラもあって「抱腹絶倒」とはいかなかった。ただ初日のキャストでは「笑いが絶えなかった」という評もあるので、喜劇オペラをこなせる歌手もいたようだ。

9月、ヴェルディの《二人のフォスカリ》が田中祐子指揮、伊香修吾演出で上演された。装置はほとんどなく、衣裳もモノクロ調のセミ・ステージ形式といってもよいような簡素な舞台。15世紀、ヴェネツィア共和国の総督として名をはせた実在のフランチェスコ・フォスカリの晩年の悲劇を描いた歴史オペラで、政界の裏側が救いのない暗さで描かれている。80歳の老フォスカリ（押川浩士）、息子ヤコポ・フォスカリ（海道弘昭）、ルクレツィア・コンタリーニ（西本真子）らの歌唱には熱がこもり、深い感情表現で第1幕終盤では泣かせた。ヴェルディ研究には欠かせない作品だが、悲劇性が強調されるあまり作品のテーマがみえてこず、娯楽的要素も乏しいので、今後の上演には今一つ工夫が必要かもしれない。

**日本オペラ協会**は2月、三木稔の《源氏物語》日本語版を初演した。コリン・グレアム台本による英語版は2000年に米国で初演され、翌2001に日本でも上演済みだが、三木が同時進行で作曲していた日本語版はこれまで上演の機会がなかった。日本語の語感と音楽がしっくりと融和しているだけでなく、岩田達宗の演出と歌手陣、管弦楽（東京フィルハーモニー交響楽団）の好演により作品内容が大きく深められたことを高く評価したい。平安貴族の美しい絵巻物から現代に通じる人間ドラマへの発展である。演出家は主人公光

源氏（岡昭宏）の心にある深い闇に注目し、それゆえにこそ同様に心に闇を抱えた女性たちに寄り添い続けたのだとする。その視点を六条御息所（佐藤美枝子）、藤壺（向野由美子）、葵上（丹呉由利子）、弘徽殿（森山京子）、少納言（河野めぐみ）らがしっかりと押さえ、それぞれの立場の苦悩や哀しみを歌い上げた。頭中将（海道弘昭）ら男声群、二十絃箏（山田明美）や中国琵琶（叶桜）の格調ある演奏も忘れがたい。指揮は田中祐子。

7月の《夕鶴》も岩田達宗演出。民話調の装置や衣裳のもと、つう（佐藤美枝子）の織る布は子どもで、与ひょう（藤田卓也）にはつうの姿が見えなくなるシーンがあり、最後には運ず（江原啓之）も惣ど（下瀬太郎）もひどく打ちのめされる…といった趣向の岩田演出だが、筆者の見るところ、この作品に関してはまだ決定版は出来上がっていないようだ。

オペラ歌手育成部の新人育成オペラアンサンブル公演でハイドンの《漁獲りの娘たち》が日本初演された。指揮：佐藤宏、演出：恵川智美。

### ■ 東京二期会

一連の二期会創立70周年記念公演を実施。2月にはジュネーヴ大劇場との共同制作で、2022年6月にジュネーヴでプレミエしたダニエル・クレーマー演出の《トゥーランドット》をディエゴ・マテウス指揮で上演した。演出では、レーザー光線の多用等による「舞台美術の概念を超越」した「光の彫刻」として事前に宣伝されており、それは確かに美しく、ドラマ展開に即して刻々と変わっていく最新テクノロジーは見事なものだった。だが、それにも増して筆者に強い印象を与えたのは、過度に残酷かつ暴力的なシーンの多さの方だった。トゥーランドット姫（田崎尚美）が望むのは男性器の切除であり、「生殖と繁殖を機械施設で行う監視国家」という近未来的な世界が描かれて、いわばホラーオペラの雰囲気だ。最後に王子カラフ（樋口達哉）との愛が成立して舞台が花一面になったときでさえ、残酷な殺害の恐怖感がつきまとう。トゥーランドットの人物像をそのように描く演出に筆者は共感しかねるが、題名役の田崎を筆頭にリュー（竹多倫子）、大臣ピン（小林啓倫）、パン（児玉和弘）、ポン（新海康仁）ら歌手たちの演唱が実に見事だったことが観劇の救いとはなった。

4月にR. シュトラウスの《平和の日》がセミ・ステージ形式で日本初演された。17世紀半ばのドイツで、司令官（小森輝彦）の妻マリア（渡邊仁美）の説得で長引く戦争が停戦に導かれ、ようやく訪れた平和の日を喜び合う一幕物。1938年、ミュンヘンでの初演後、作者らの意図に反してナチに利用され、ドイツ国内で何十回も上演されたいわくつきのオペラだ。当時の苦い記憶の残る人々にはおそらく観たくない作品であり、実際、今日まで世界的にも上演機会は極めて限られている。だが、過去の戦争体験者が減った今、どちらの立場に立つかといった次元を超えた平和希求のオペラとして上演された意義はあろう。現在の熾烈な中東情勢等を顧みるまでもなく、ラストシーンの平和賛歌は大きく高揚して共感に導いた。指揮は準・メルクル。

東京二期会コンチェルタンテ・シリーズ《平和の日》撮影：堀衛

7月の《椿姫》は2020年に原田諒演出でプレミエされたプロダクションの再演だが、そ

の原演出を活かしつつも澤田康子が再演演出を施して、音楽に合わせて表現すれば自然とこうなるといった風情の美しい舞台となっていた。練達の指揮者アレクサンダー・ソディーのもと、歌手陣も好調で、オペラ特有の高揚感にひたることができた。ヴィオレッタ（谷原めぐみ）も健闘したが、筆者が特に感嘆させられたのがアルフレード（村上公太）の成長ぶりだ。歌と演技、劇内容がぴたりと一致して心の動きが逐一伝わってくる。キャラクターとしてもウブで純真な青年にふさわしく、正に適役の魅力だ。ラストシーンも息を引き取ったヴィオレッタをアルフレードが抱いて幕。そうした原作通りの結末がやはり自然に感じられる好演だった。

10月はシュトゥットガルト州立歌劇場との提携による《ドン・カルロ》。シュトゥットガルトで2019年にプレミエされたロッテ・デ・ベアの演出で、「この作品の新しい姿を示した」と評されたという。演出家によれば「20〜30年後のスペイン」という想像上の時代に設定し、「人間の共同体そのものを問題にする」と。舞台には大きな壁があり、森や宮殿といった具象的なものの表現は、ベッドを除けばほとんどない。あるのは圧政と暴力の連鎖で緊張感が常にみなぎる。第3幕ではドン・カルロ（樋口達哉）と子どもたちの場面でG.E.ヴィンクラー作曲の自由を求める《プッシー・ポルカ》が挿入されていた。という具合で芸術というより論文を読んでいるような理知的な舞台だったが、それを補うのが音楽面の充実だ。歌手では逆境に悩み続けるドン・カルロの苦難の姿を、樋口がいつもながらの体当たりの熱演でしっかりと表現したが、さらに望むなら王子らしい身ごなしもほしい。エリザベッタの竹多倫子も同様。その点、エボリ公女の清水華澄は歌と演技双方で華やかで貴族的な雰囲気を感じさせて好演だった。指揮はレオナルド・シーニ。全体の演唱、演奏が一層整うことにより、この演出の良さはもっと見えてくるかもしれない。

11月は日生劇場との共催でハンス・ヴェルナー・ヘンツェ作曲《午後の曳航》。三島由紀夫の同名の小説が原作で、台本（ハンス＝ウルリッヒ・トライヒェルによるドイツ語）はほぼ原作通りの筋立て。1990年に《裏切られた海》という意味のドイツ語題名でベルリン・ドイツ・オペラが初演。その後2003年の日本での上演（演奏会形式、日本語上演）に際して改訂された。その改訂版が今回はドイツ語上演されたもので、舞台上演としては日本初となる。英雄視していた航海士・竜二（与那城敬）に失望した少年・登（山本耕平）が、グループ内での歯止めの効かない暴走に煽られて竜二を殺害。大人の世界に反抗する少年たちの屈折した心理、セックスや暴力などが重い印象を与えるドラマだが、その暗さを音楽が見事に救っている。悲劇性を一面的に強調するのでなく、独特の美しい響きで人間性を多面的に描き出す。アレホ・ペレス指揮のもと、聴きごたえのある豊かな音楽を楽しむことができた。主人公・登の感情の起伏を的確にとらえた演出（宮本亞門）も効果的だった。

### ■ 日生劇場

開場60周年を迎え、一連の記念公演を開催。そのうちオペラでは自主制作の《メデア》と《マクベス》、そして上記東京二期会共催《午後の曳航》の計3本が上演された。《メデア》はルイージ・ケルビーニ（1760〜1842）がフランス語台本（フランソワ＝ブノワ・オフマン）に作曲し、1797年パリで初演。自分の子どもを殺す等の残虐な行為でギリシャ悲劇に描かれた王女メディアを題材に、その惨事に至る過程を描いた3幕のオペラで、1909年にイタリア語版がミラノ・スカラ座で初演され、今回はそのイタリア語版

の日本初演となった。長く歴史に埋もれていた同作を1952年、マリア・カラスが歌って蘇演させたのは有名な話で、超絶の歌唱力と壮絶なドラマ表現が必要とされることから上演のハードルは高かった。それがほぼ国内の陣容だけで何と見事に日本初演されたことだろう。2日目に観劇したところ、メデア（中村真紀）やネリス（山下牧子）らの演唱の深さ、演出（栗山民也）の心理表現の的確さ等上演を支える水準の高さに感嘆させられた。元夫ジャゾーネ（城宏憲）や王クレオンテ（デニス・ビシュニャ）らがいかにメデアを理不尽に痛めつけてきたかが納得でき、怒りと復讐心に燃えたメデアが、ギリシャ神話の世界から現代に乗り移ったかのごとく、我々と等身大の人物像として激しくも深い感銘を与えた。指揮は園田隆一郎。

11月の《マクベス》は数多く上演されているヴェルディの人気作だけに、新演出（粟國淳）には格別の思索が必要だったかもしれない。ドラマ内容の暗さに現在の中東・ウクライナ情勢の暗さが合体したかのように、終始暗い印象を与える舞台だった。だが、筆者としてはどこかに明るさを感じさせるものも欲しかったと思う。歌手で最も光っていたのは、マクベス夫人の岡田昌子だ。夫マクベス（大沼徹）に発破をかけ、自身が心を病んでなお発破をかけ続ける。5月の《メデア》に

NISSAY OPERA 2023／日生劇場オペラ教室2023《マクベス》
撮影：三枝近志／提供：（公財）ニッセイ文化振興財団
［日生劇場］

も主演しているように、日本のソプラノには珍しいほど強い女性を十分に歌える声とキャラクターの持ち主だ。作品としては男声中心の闘争オペラであり、バンクォー（妻屋秀和）、マクダフ（大槻孝志）らによってエネルギッシュに歌われて、たけだけしい雰囲気に満ちていた。指揮は沼尻竜典。

### ■ オペラシアターこんにゃく座

《森は生きている》、《あん》、《さよなら、ドン・キホーテ！》、《タング》ほか多様なレパートリーで年間を通して全国巡演したのに加え、一般公演として新作《アイツは賢い女のキツネ》初上演と、《浮かれのひょう六機織唄》を45年ぶりに復活上演した。

2月の《アイツは賢い女のキツネ》は《利口な女狐の物語》の訳題で知られるヤナーチェクのオペラ（1924）を加藤直の台本・訳詞・演出で上演したもの。管弦楽は6人の室内楽に編曲（萩京子、寺嶋陸也）され、原曲の魅力には及ばないながらヤナーチェクの音楽の特性を断片的に伝えて、同座の音楽表現の幅を一歩拡げた。女のキツネ・ビストロウシカ（小田藍乃）の半生に加え、森の動物たちが生き生きと暮らす様子も面白く演出されて、子どもたちに喜ばれそうな舞台だ。ビストロウシカが銃弾に倒れた後、かえる（沖まどか）の言葉が理解できるようになった森番（大石哲史）は銃を捨てる。この結論を分かりやすく視覚化した演出から自然保護のテーマが浮かび上がった。

9月の《浮かれのひょう六機織唄》は若林一郎台本、林光作曲で1977年、同座で初演された作品を新演出（大石哲史）でよみがえらせたもの。女性が担う機織り労働の過酷さや金儲けに走る男たちという設定は《夕鶴》にも共通するが、こちらは涙と笑いの七五調ソング劇だ。座員OBの佐山陽規による庄屋は抜群の明晰な表現力で感動的だったし、村

の娘たち、下男たちのアンサンブルも楽しい。今回は民話調の舞台だったが、現代風俗で今風に味付けしても面白いかもしれない。

### ■ 東京・春・音楽祭

リッカルド・ムーティによるイタリア・オペラ・アカデミー in 東京 vol.3 が《仮面舞踏会》で開催されたほか、ワーグナー・シリーズ vol.14 として《ニュルンベルクのマイスタージンガー》、プッチーニ・シリーズ vol.4 として《トスカ》がいずれも演奏会形式で上演。バイロイト音楽祭提携による子どものためのワーグナー《ニュルンベルクのマイスタージンガー》も上演されるなど、世界的に有力な指揮者、歌手らの参加により傑出した成果を挙げた。

アカデミーの初日に行われたムーティによる《仮面舞踏会》作品解説では、受講生の歌手と指揮者らを客席最前列に座らせてオーケストラ（東京春祭オーケストラ）を指導。ヴェルディ本来の正しい姿をかくしゃくとした話しぶりで熱心に伝えた。ついでムーティ指揮で《仮面舞踏会》の演奏、若い音楽家による同作の抜粋公演が行われた。

《ニュルンベルクのマイスタージンガー》はマレク・ヤノフスキ指揮でハンス・ザックス（エギルス・シリンス）、ベックメッサー（アドリアン・エレート）、ヴァルター・フォン・シュトルツィング（デイヴィッド・バット・フィリップ）ら凄腕の歌手勢に NHK 交響楽団が共演。演奏水準の高さは抜群で実に至福のワーグナー鑑賞の一夜となった。

フレデリック・シャスラン指揮で読売日本交響楽団が演奏した《トスカ》も同様の素晴らしさで、中でもスカルピアのブリン・ターフェルの存在感が際立っていた。巨体と量感のある声、迫力ある歌いぶり、顔の表情もそのものずばりで、ニヤリとすると本当にぞっとするほど悪役の凄みが効いている。トスカ（クラッシミラ・ストヤノヴァ）、カヴァラドッシ（イヴァン・マグリ）らも好演で、これが舞台上演だったら何倍も成果が膨らむだろうにと思わずにいられなかった。

子どものためのワーグナー《ニュルンベルクのマイスタージンガー》は前年に引き続き三井住友銀行東館ライジング・スクエア 1 階アース・ガーデンに特設ステージを作って上演したもの。カタリーナ・ワーグナー監修・芸術監督により約 75 分の短縮版に子ども向けの演出をつけて歌唱を原語、台詞を日本語で上演。石坂宏指揮のもと、東京春祭オーケストラの演奏でハンス・ザックス（友清崇）、エファ（田崎尚美）、ポークナー（斉木健司）、ベックメッサー（萩原潤）らが出演した。

### ■ 東京文化会館

ニューヨークのジャパン・ソサエティーとの共同委嘱によるオペラ《note to a friend》が舞台芸術創造事業として日本初演された。芥川龍之介が自殺する年に書いた《或旧友へ送る手記》他を原作にデヴィッド・ラング（1957～）が台本（英語）と作曲を手掛けた約 60 分の一幕物。歌手はジャズ・ヴォーカリストのセオ・ブレックマン 1 人だけで役名はない。亡霊のように友人（黙役）の部屋に現れ、自殺願望に至った心理や死ぬ方法、亡くなった肉親の思い出などを語るように歌い、最後に死に際の様子を臨場感豊かに歌って「僕はもういない」と締めくくった。死にまつわる諸々の懸念が冷静に整理されていく中で、自然の摂理としての死が恐怖感なく肯定され、筆者は生きる力を逆に自覚することができた。静謐な緊張感を表現した室内楽、冥界と現世との交差を違和感なく視覚化した演出（笈田ヨシ）とも秀逸な、異色オペラだった。

恒例のオペラ BOX は、メノッティ《Help！Help！グロボリンクスだ！～エイリ

アン襲撃!! ～》の6年ぶりの再演。その他観客の各年代別に企画したシアター・デビュー・プログラム《ピノッキオ》、《シミグダリ氏または麦粉の殿》、ワークショップ・コンサート《バーバラの魔法のくすり》の音楽劇などが上演された。

### ■ 東京芸術劇場

全国共同制作のオペラがこの年に2つ重なり、子どもオペラも引き続き開催されるなどオペラに実りの多い年となった。2月の全国共同制作／東京芸術劇場シアターオペラvol.16は《田舎騎士道～カヴァレリア・ルスティカーナ》と《道化師》の2本立て。両作で主役を歌ったテノールのアントネッロ・パロンビが量感と精力に満ちた歌唱で圧巻だったのに加え、他の歌手達もアッシャー・フィッシュ指揮のもと、音楽の内包するドラマを的確に演唱してエネルギッシュな舞台を展開し、音楽の美しさも十分伝わってきた。演出（上田久美子）では、歌手とダンサーが一組になって心理や劇進行を表現。その効果がよりよく発揮できたのは普遍性がより高い《道化師》の方だったろう。対して《田舎騎士道》の方は極端に閉鎖的な村社会での出来事という場面規定がやや不十分だった感もあるが、総じて新鮮味のある演出だったことは評価したい。

11月の全国共同制作オペラは《こうもり》。演出（野村萬斎）が新鮮なのはこちらも同様で、かなり大胆に日本化したところに特色がある。音楽面が高水準なのも同様で、阪哲朗指揮ザ・オペラ・バンドの精彩に富んだ演奏は有無を言わさぬ巧さだ。歌手はアイゼンシュタイン（福井敬）、ロザリンデ（森谷真理）、アデーレ（幸田浩子）、ファルケ博士（大西宇宙）らが好演し、なかでも傑作なのはオルロフスキー公爵の藤木大地だ。ミカドの装束で雅楽の響きと共に登場し、歌（原語）もセリフ（独自に勘案されたおふざけ調の日本語）もファルセットでこなし、抜群の雰囲気づくりで客席を湧かせた。ズッコケ気味で大衆路線の舞台。オペレッタならではの冒険かもしれない。

夏のサラダ音楽祭で子どものためのオペラ《アトランティス・コード》が日本初演された。伝説の島アトランティスのナゾを探す少年と母親の物語で、作曲はフランク・シュヴェマー。菅尾友演出、齋藤友香理の指揮で歌手3人と小編成アンサンブルの出演。

### ■ その他の公演から（東京）

**小澤征爾音楽塾**は《ラ・ボエーム》をディエゴ・マテウス指揮、デイヴィッド・ニース演出で上演。ロドルフォ（ジャン＝フランソワ・ボラス）、マルチェッロ（デイヴィッド・ビズィック）ら国際派の歌手が、訓練された合唱団と共に高水準の安定した公演を聴かせた。終演後、音楽監督の小澤征爾が車椅子でステージに出て喝采を浴びたが、翌2024年2月6日に逝去したため、これが音楽塾公演での最後の姿となった。なお、この《ラ・ボエーム》は同年8月のセイジ・オザワ 松本フェスティバルで第1・2幕のみ上演された。

**日本橋オペラ研究会**による「日本橋オペラ」が創立10周年を迎え、記念公演として5月に《アイーダ》を金管5重奏・打楽器・ピアノ伴奏版で上演した。指揮・編曲を佐々木修、演出は福田祥子（アイーダ役も）。さらに11月にはヴェルディ《仮面舞踏会》の原典版《グスターヴォ三世》をピアノ伴奏版で日本初演した。《仮面舞踏会》と話の筋立ては同じだが、作中人物の名前や都市名が異なり、音楽も少し違う。女声の3役がまずまずの好演をした一方で男声の不調だったのが惜しまれる。せっかくの作品紹介なのだから、もっとしっかり準備をした歌唱で聴きたかった。

**立川市民オペラ**が31周年となり、コロナ禍で出来なかった演出付きのオペラ公演をようやく再開、《カヴァレリア・ルスティカーナ》を直井研二演出で上演した。キャスト、合唱ともオペラに出る喜びが率直に伝わってくるような初々しい舞台だった。合唱団にはマスク姿も見られて感染がまだ続いていることを思わせたが、市民参加ならではの熱気は十分。こうした地域密着型のオペラ活動がコロナ禍を克服してさらに発展していくことを期待せずにいられない。指揮は古谷誠一。管弦楽は結成10年の活動歴を持つアマチュアのTBSK管弦楽団。

### ■ 神奈川県、群馬県

**横浜シティオペラ**が創立40周年を迎え、記念公演として《魔笛》を日本語で上演した。器楽はピアノ（服部容子）と電子オルガン（赤塚博美）のみだが、演奏の水準が高いので音楽的不足感はなかった。歌唱面もそれなりに充実していて、夜の女王（梅園絵美子）、タミーノ（菊池慈生）ほか全キャストが自身の力を発揮。同地域と近隣で次の世代が育っている実感を持つことができたのは何よりの収穫だが、その一方でまだまだ研鑽の余地が多いのも事実だ。指揮は佐藤宏充。演出（中村敬一）は映像（荒井雄貴）を大胆に使い、見て楽しい舞台になっていた。

**藤沢市民オペラ**の方は50周年記念となり、ロッシーニの《オテッロ》を演奏会形式で上演した。同名のオペラではヴェルディの作品が有名だが、ロッシーニの方は歌唱、合唱、管弦楽ともに超高度のテクニックが要求される突出した難易度のオペラ・セリアだ。話の筋立てに大差はないものの、男声同士の対決がずっしりと重い内容になっている。歌手には国内トップクラスの陣容が配置され、輝かしい高音を聴かせたロドリーゴ（小堀勇介）をはじめ、オテッロ（宮里直樹）、デズデーモナ（砂川涼子）、イアーゴ（山本康寛）、エミーリア（中島郁子）、エルミーロ（妻屋秀和）らが健闘。合唱、管弦楽ともにアマチュアで総じてプロより年齢層は高いようで、こちらも懸命の取り組みで大奮闘。ドラマの重さと演奏から伝わる緊張感とで、聴いている方も極度の緊張連続の5時間弱。難曲に挑戦する気概は立派だが、もう少し楽しませる「市民オペラ」であってもいいかもしれない。指揮は園田隆一郎。

**群馬オペラ協会**が第17回公演を《ジャンニ・スキッキ》と《道化師》で開催した。管弦楽は6人編成のGOAアンサンブル・コルノロッソ。総監督・角田和弘のカニオをはじめ、リヌッチョ（澤﨑一了）、トニオ（清水良一）、ネッダ（新井晶子）ら同県関係者や首都圏の歌手を集め、星出豊指揮、三浦安浩演出で堅実な舞台となったが、ここでも他の地域オペラと同様、合唱団（群馬オペラ協会合唱団、コーロ・パリアッチ）の奮闘ぶりが舞台を熱く盛り上げた。歌手やスタッフはよそから呼べるが、多人数の合唱団、児童合唱は地元で育てるしかない。群馬はそれができている！と感じられる公演だった。そこに将来性が感じられた。

### ■ 愛知県、岐阜県

**愛知県芸術劇場**は開館30周年記念として全国共同制作《道化師》《田舎騎士道》（東京芸術劇場の項で前述）を上演。**名古屋二期会**は《カルメン》を佐藤正浩指揮、岩田達宗演出で上演したほか、名古屋市芸術創造センターとの連携で《森は生きている》、ニューイヤーコンサートでは《ルサルカ》ハイライトを日本語で上演した。このほか**愛知祝祭管弦楽団**の《ローエングリン》演奏会形式、**ザ・ディライトフル・カンパニー**による蒔田裕也作曲《メドゥーサ》上演、**名古屋テアトロ管弦楽団／合唱団**による《ラ・ボエーム》コン

サート形式、**セントラル愛知交響楽団**《ドン・ジョヴァンニ》セミ・ステージ形式などが行われた。

**三河市民オペラ**がジョルダーノ《アンドレア・シェニエ》を上演した。2017年に《イル・トロヴァトーレ》を上演して以来6年ぶりの公演。市民参加の公開オーディションで選んだ主要キャストには国内第1線の実力派が並び、管弦楽はセントラル愛知交響楽団とプロフェッショナルな陣容だが、筆者が最も感興を覚えたのは地元のアマチュアを組織した三河市民オペラ合唱団の味わい深い演唱だった。合唱指揮（近藤惠子）の力もさることながら、参加したメンバーそれぞれがよく訓練され、演技もしっかりこなして主体的にオペラに参加している。職業合唱団とは異なる多様性を内包する表現に、市民オペラならではの代えがたい魅力が感じられたのだ。プロの方は題名役の笛田博昭、マッダレーナ・ディ・コワニーの小林厚子ほかが堅実に取り組んで特に不足感はないのだが、プロであるからには指揮（園田隆一郎）を含めてもう一つ音楽的表現を深めてほしかった面もある。まあ、かなり難しい作品なので、どこで妥協するかの問題ともいえるのだが。感心したのは演出（髙岸未朝）だ。潤沢な予算を活かした美しい舞台で作品内容を分かりやすく伝えてムリがない。現代的な読み替えをせず、作品に即して自然体で表現をしたことが公演を成功に導いていた。客席の熱気とまれにみる盛り上がりはお祭りのように非日常的だ。大きな打ち上げ花火で日本のオペラ界に強烈な刺激を与えた効果は見事なものだが、そこから蓄積されていくものは何なのか、オペラ界全体の問題としてしっかり考えておくべきだろう。

**岐阜県揖斐川町**で「清流の国ぎふ」文化祭2024のプレイベントとして創作オペラ《徳山ブルース》が初演された。地元に作られたダムのために村を追われた「徳山村民」約1500人の故郷への想いを綴った作品で、台本（弓削智裕）、作曲・指揮（森三恵子）、演出（なみ悟朗）らスタッフ、キャストとも地域・近隣とその関係者の力を結集した文字通りの地域オペラだ。人口減少傾向にある過疎の地域だが、伝統文化の保存だけでなく、創造的なオペラ活動も継続されているのは町の活性化にとっても大きな力となっているのではないだろうか。

### ■ 広島県

**ひろしまオペラ・音楽推進委員会**他主催の「ひろしまオペラルネッサンス」ではアンサンブルシアターⅡとして《フィガロの結婚》を上演した。前2022年の公演ではアンサンブルにデコボコがあったのに対して、今回は見違えるようにアンサンブルが整っていた。キャストを全国オーディションで選んだのは同じだが、特にアンサンブル重視で選んだ結果、20代が多い若手チームになった。顔ぶれは地元近郊と関西、名古屋、首都圏からがほぼ半数ずつ。全員が約1カ月広島に滞在して練習に励んだという。財政上の事情でその経費はほぼ自己負担だったそうだが、それでも出演したいと願う歌手が集まった。若手だけに演技力は未熟な面が否めずアリア歌唱にも深みはないものの、アンサンブルだけはきちんとしているところにモーツァルトをやる意義がある。芸術監督・演出（岩田達宗）は戦争の続く世界情勢への思いから、作品に内在する対立、争い、許しの心にポイントを当てた。満席に近い客席からは笑いや拍手、大喝采が続き、30年以上続いている同事業に地元の支持が高いことを伺わせた。指揮は柴田真郁。

広島ではこの他**広島シティーオペラ**第13回公演で《タンホイザー》が上演され、中国・四国地方初のワーグナー公演を記録した。ま

た、**広島オペラアンサンブル**第47回公演で《マダムバタフライ》が行われたほか、演奏会形式や小オペラなどが開催されている。

### ■ 北海道、宮城県

**札幌文化芸術劇場 hitaru（札幌市芸術文化財団）**がhitaruオペラプロジェクト第1回として《フィガロの結婚》を原語上演した。出演者は在住・出身など北海道にゆかりがあることを条件にオーディションを実施し、キャスト、合唱、管弦楽（札幌交響楽団）ともオール北海道の顔ぶれとなった。指揮は奥村哲也。三浦安浩演出で場面を北国に設定。雪景色の中、毛の帽子をかぶった人々や冬支度で猟に出かける伯爵（岡元敦司／門間信樹）など、地元北海道の生活ぶりを実感させる舞台に親しみを感じた観客もいただろう。フィガロ（大塚博章／三輪主恭）、ケルビーノ（川島沙耶／吉田叶倫）らが、頻繁に出てきてよく動く合唱団と共に芝居心満載の笑いに満ちた舞台を展開した。

**北海道二期会**は翌2024年に創立60周年を迎えるにあたり、これまでの活動を振り返って独自に構成した名場面集「～演出家・岩田達宗の～女はみんなこうしたもの」を上演。**札幌室内歌劇場**は札幌時計台2階ホールで「手のひらオペラ」を開催、《バスティアンとバスティエンヌ》、《モーツァルトとサリエリ》、マスカーニの《ザネット》などを上演した。

**仙台オペラ協会**は第47回公演《ドン・ジョヴァンニ》を日本語上演した。オペレッタなどを除いて原語上演がすっかり定着した昨今だが、久しぶりに訳詞で聴いてみたら意外なまでに新鮮に感じられた。訳詞は二期会提供の版を基本にしながら、稽古する過程で少し直したというものでかなり良くできている。原語で歌うよりも歌唱に実感がこもり、600席弱の会場だったこともあって声はよく通り、それなりに楽しめる公演になっていた。地元に男声歌手が少ないため、客演を山形や福島などから迎えており、東北のオペラ活動の中心地としての存在意義を発揮。地域に根を下ろし、2年後には50周年を迎える同協会である。活動の健全な継続を願わずにいられない。芸術監督：佐藤淳一、指揮：佐藤寿一、演出：伊藤み弥。

### ■ 鹿児島県、徳島県

**鹿児島オペラ協会**はコロナ禍で延期されていた創立50周年記念公演を《蝶々夫人》で実施した。従来地元の声楽家らで固めてきたキャストを全国オーディションでの選抜に変えたことで、公演の歌唱水準は向上したと報じられたが、観客動員や財政面はどうだったのだろう。独自の解釈を加えた演出（岩田達宗）、鹿児島出身で同地の地域性に詳しい指揮者（下野竜也）の取り組みが注目されるなど、同オペラ協会の活動も半世紀を越えて、新たな段階に入っていく可能性が感じられる。組織強化と制作能力が今後一層求められるようになるのではないか。

**オペラ徳島**は設立25周年、第20回オペラ記念公演として《こうもり》を上演した。会場難のためオーケストラピットのない「あわぎんホール」（約800席）を使用し、器楽はピアノ（谷池重紬子、他）とパーカッション（荻原里香）のみ。コロナ禍で本格的な公演は4年ぶり。歌唱や演技にはややデコボコがあった中で、光っていたのはオルロフスキーの高谷みのり。メゾの声がしっかりと出ていた。仙台オペラ協会等と同じく、同地域におけるオペラ団体としてオンリーワンの存在だ。客席を埋めた大勢の観客の積極的な反応が地元の支持を伝えていた。指揮は山上純司、演出は松本憲治。